

審査の結果の要旨

氏名 池田 めぐみ

池田氏の博士論文の目的は、正課外活動におけるどのような要因がキャリアレジリエンスの獲得実感に影響を与えるのかについて明らかにすることにある。

本論においてキャリアレジリエンスは「職場環境の変化や、希望通りの職に就けないなどといったキャリア形成の危機において、その状況に対処する個人の能力・特性」と定義されているが、不確実さをましている現代社会において重要な概念であることについて異論はないだろう。

この論考のユニークな点は、高等教育においてキャリアレジリエンスが育つ環境として正課外活動に着目している点である。サークル活動やプロジェクト型の課外学習は自主性が強く、想定外のできごとへの遭遇や人間関係の問題への対処などがキャリアレジリエンスの向上に寄与すると考えられるためである。新型コロナウイルスによって多くの正課外活動が停止している中、その価値をあぶりだす研究になっている。

本論文の先行研究レビューは大きく (1) キャリアレジリエンス概念の発展 (2) 大学教育とキャリアレジリエンスの育成 (3) 正課外活動とキャリアレジリエンスの3つの観点から行われている。レビューの結果、(1) キャリアレジリエンスはキャリア上の危機からの回復とポジティブな変化に寄与しうることが確認されていること (2) 労働者がキャリアレジリエンスを身につけるだけでなく、大学教育においてその育成が求められていること (3) キャリアレジリエンスの増幅には職場での困難やキャリア上の困難に対処することに類似した経験をすることが重要とされており、正課外活動がその条件を満たしていることが指摘されている。

著者はこのような研究群を前提として「正課外活動におけるどのような要因がキャリアレジリエンスの獲得実感に影響を与えるのかについて明らかにする」という問いをたて、問いに答えるために、クラブ・サークル活動と正課外プロジェクトについて調査研究を行っている。

第1の調査研究では、22大学の大学生632名を対象に、クラブ・サークル活動への学生のどのような関わり方がキャリアレジリエンスの獲得実感に影響を与えるのかを検討した。分析の結果、積極的な関与、目標達成に向けて取り組み、メンバーとの密なコミュニケーションおよび内省活動がキャリアレジリエンスの獲得実感に影響を与えることが示された。

第2の調査研究では、6大学で正課外プロジェクトに参加した大学生206名を対象に、学生の行動と大学の支援が、学生のキャリアレジリエンスの獲得実感に与えている影響についての検討を行った。具体的には学生の行動として積極的な関与を取り上げ、教職員の支援および他の学生からの支援がキャリアレジリエンスの獲得実感に与える影響

について検証した。分析の結果、学生のキャリアレジリエンスの獲得実感に直接的な影響を与えたのは、積極的な関与、教職員の他律的な支援、同期からの支援、先輩からの支援であった。また、教職員の自律性支援は、学生の積極的な関与に影響を与え、間接的にキャリアレジリエンスの獲得実感に影響することが確認された。

この2本の調査研究の知見を統合する形で、正課外活動においてキャリアレジリエンスの獲得に影響を与える要因について以下の3点にまとめられている。1) 学生は積極的に活動に関与し、キャリアレジリエンスの獲得につながる具体的な経験をするによって、キャリアレジリエンスの獲得実感を高めていること 2) 他の学生からの支援はキャリアレジリエンスの獲得につながる経験とキャリアレジリエンスの獲得を支えていること 3) 平常時には教職員の自律性支援が学生の関与を促し、困難な挑戦に挑む際は他律性支援がその対処をささえていること。

著者はさらにこの調査研究の知見から、正課外プロジェクトにおけるキャリアレジリエンスの獲得支援に向けた実践的示唆として、1) 自律性支援と問題解決支援を使い分ける 2) 個人的な面談の時間を作る 3) 正課外プロジェクトの数を増やす 4) 専門性の高い教職員を顧問につけることを提言している。

9月16日に開催された審査会では、池田氏から論文内容について発表があり、質疑応答が行われた。全体としてキャリアレジリエンスと正課外学習の関係に着目した独創性や、統計的分析によって関係性を実証的に明らかにしている点については高く評価された。

しかしながら、残された課題も存在する。審査員からは、誤字脱字の指摘とともに、1) 学生の自主性の担保との教職員の関与が矛盾しており両立させるのが難しいのではないか 2) 今後キャリアレジリエンスに関する学習をキャリア教育の中にどう位置付けていくのか、3) 分析のモデルについて、他のやり方もあったのではないか、4) コロナ禍においてこの研究の知見から正課外活動をどう再開させればよいのかなどの質問がでて、受験者と審査員の間で質疑応答がなされた。

質疑応答における返答のなかには、認識が必ずしも明確ではないことを示唆するものもあったが、論文の構造は明確であり、実証研究で着実な知見を得られていることから、池田氏には、以上の諸課題を今後克服していく資質・能力が十分にあると判断し、審査員満場一致にて、本論文を博士（学際情報学）の学位請求論文に値するものと認めた。